水の源

MIZUNOMINAMOTO

2015.12
31

ウォークルポ
テーマは「食の創出」飛騨高山グルメグランプリ
岐阜県高山市

特集
第9回全国水源の里シンポジウム 清流が紡ぐ人と人
岡山県真庭市

特集
地方創生「首長勉強会」第2回
講師：石破 茂さん、山内 道雄さん、小田切 徳美さん

第7回全国水源の里 フォトコンテスト

巻頭インタビュー　水源の里へ思いを馳せる
山は人間本来の居場所
株式会社モンベル
代表取締役会長　辰野 勇さん

青森県西目屋村　「乳穂ヶ滝氷祭」　開催日：2月21日

高さ 33m の乳穂ヶ滝が氷結する厳冬時、滝の太さや形状によって、津軽の作物の豊凶占いが執り行われる伝統的な神事。

巻頭インタビュー
水源の里へ思いを馳せる

聞き手：『水の源』編集長　町井且昌

山は人間本来の居場所

株式会社モンベル 代表取締役会長
辰野　勇さん

自然とのふれあいを求める愛好家たちは、こぞって里山を訪れる。名山ならずとも、彼らの冒険心を刺激するフィールドが里山にはあるのだという。今回のゲストは、大自然をこよなく愛し、世界各地を旅してきた（株）モンベル代表取締役会長の辰野勇さん。「SEA TO SUMMIT 2015」由良川大江山大会の際、山の魅力についてうかがった。

――辰野さんは単独登山が多いのですか。

ガイドをするときは別にして、プライベートで行くときはたいてい１人ですね。

――１人で登るなんて想像を絶します。可能なことなんですか。

やっぱり１人の方が楽といえば楽です。１人だと行動も早いですし。万一転落したらアウトですが、落ちなければいいわけで（笑）。アルプス三大北壁と呼ばれる、アイガー北壁なんかは垂直に 1,800m の岩壁を登る。東京スカイツリー３つ分ですから落ちたらまず助からないですよね。

――アイガー北壁も１人で？

あのときは２人で登りました。登頂成功は日本人として２人目（２パーティー目）で、私たちより前に２人で登ったパーティーは、１人が滑落して亡くなりました。いろんな主義があって、単独がいいという人もいます。私は２人で互いに安全を確保しながら登りました。

――本格的に登山を始められたのはいつごろですか。

どういう登山を本格的と言うのかにもよりますが。高校１年生のときに読んだ、ハインリッヒ・ハラーの文章に強く影響を受けました。アイガー北壁に挑んだオーストリア人の彼が書いた『白い蜘蛛』の１節が、国語の教科書に載っていたんです。雪崩が起きてあわや遭難という目に遭う。ハラハラドキドキするような冒険談です。それを読んで子ども心に憧れましたね。で、この山に登ろうと決意した。16 歳でした。それから体を鍛え、アイガー北壁を意識した山登りを始めました。当時、日本人は誰も登っていなかったので、一番乗りしたいという志を持ったんです。

――山が好きだから登ると。

私の場合は子どものころから山登りをしていますし、健康のためということでもなくて、山の自然に浸りながら歩くのが好きだからだと思います。

やっぱり山というのは自然環境があって、おいしい空気と緑に囲まれて……。人間の本来の居場所なんでしょうね。そういうところに心惹かれる、遺伝子が組み込まれているような気がします。

――社名の mont belle（フランス語で“美しい山”）というのは綺麗な名前ですが、何かいわれがあるんですか。

私たちは “mont-bell” で、フランス語でも英語でもない造語です。コスモポリタンというか、どこの国にも属さないという意味合いもあります。

――女性登山者が増えていますね。創業時から意識されていたことはありますか？

もともと山が好きで始めた会社ですから、自分たちが欲しいと思うものから製品作りをしています。

女性と男性では体型も求める色も違います。女性スタッフから女性向けの登山用品が欲しいとの声が上がり、市場に送り出しました。それが女性の登山志向を促したという面はあると思います。

――昨今の登山ブームで、登山者も多様になっているとか。最近は GPS も広く使われるようになりました。

賛否両論があって、GPS は登山の邪道であるという人もいるし、いや、これで助かったという人もいます。同様に、携帯電話にも様々な意見があります。ちょっと足を挫いたくらいでヘリを呼んだり（笑）。私は GPS を使うことで、本来人間が持っていた能力、動物的本能みたいなものが退化していくのではないかと思います。野性の勘というか生きる力が消滅していくのではと。でも今や GPS が無かったら随分不便でしょうね（笑）。携帯もそう。携帯がなかった時代に戻れるかというと難しいですね。

――海外の登山は、日本の登山ブームと照らし合わせて異なる点はありますか。

一概に海外と日本を比べることは出来ないと思いますが、一つの例として、スイスでの体験をお話しします。ヨーロッパ人の登山はどちらかというと麓から歩いて、どんなに足の不自由な人でも、太っている人でも、ゆっくりゆっくり頂上を目指す。そして、頂上から登山電車で降りてくる。40 年前、ヨーロッパへ行ったときに目にして、ちょっとしたカルチャーショックを受けました。彼らは登ることに主眼があって、下山は動力に頼る。降りることは膝にこたえますから。日本は逆で、登りに登山電車を使う。しかし、最近は登山者の高齢化が進んで、膝を悪くされる方も多いので、日本でも欧米型の登山が多くなってきているようです。

「SEA TO SUMMITは、“水辺から山頂へ”。協議会の理念は、“上流は下流を思い、下流は上流に感謝する”。逆向きではありますが、根本的な思いは同じです」と話す辰野さん

Profile 辰野 勇さん

1947 年大阪府堺市生まれ。1969 年にアイガー北壁日本人第二登を果たすなど、名実ともに日本のトップクライマーとなる。1970 年に日本初のクライミングスクールを開校。28 歳で登山用品メーカー「株式会社モンベル」を設立し、今年で 40 周年。1991 年に日本初の身障者カヌー大会「パラマウント・チャレンジカヌー」をスタートさせるなど、社会活動にも力を注いでいる。

SEA TO SUMMIT

人力のみで海（カヤック）、里（自転車）、山頂（登山）へと進む中で、自然の循環に思いを巡らせ、かけがえのない自然について考えようという、環境スポーツイベント。（株）モンベルが主催し、2009 年より開催。2015 年は、江田島（広島）や大雪旭岳（北海道）など７か所が会場となった。

写真は、10 月３日・4 日に開催された由良川大江山大会での環境シンポジウム。「自然の繋がり、自然との関わり方を考える」と題したパネルディスカッションに登壇する辰野さん（左）、協議会会長の山崎綾部市長（中）、基調講演を行った、京都府南丹市日吉町森林組合理事組合長の湯浅勲さん（右）

会場となった「飛騨・世界生活文化センター」。コンベンションホールや会議棟、ふれあい広場、ミュージアム等を備えた地域活性化の拠点施設

水源の里 Walk Repo ウォークルポ

テーマは「食の創出」

飛騨高山グルメグランプリ

岐阜県 高山(たかやま)市

【取材・文：白波瀬　聡美】

地域食によるまちおこし

飛騨高山といえば、「岐阜の小京都」ともいわれ、年間約 403 万人もの観光客が訪れる。伝統的佇まいを感じさせる古い町並みを歩くと、日本人観光客のみならず、アジア諸国や欧州からとみられる外国人ともよく出会う。そんな活気と賑わいを感じる高山市は、水源の里とはほど遠いイメージだが、実は市域の 4 分の 3 を合併した旧 6 町村の過疎地域が占めている。市街地から一歩離れると、のどかな農山村が広がり、大地に根ざした一次産業が盛んなまちなのだ。今回取材に訪れた「飛騨高山グルメグランプリ」は、その豊かな自然の恵みの可能性を探求する事業だった。

とはいえ、「ご当地グルメでまちおこし」というのは、さして目新しいトピックでもない。象徴的な出来事といえば、2006 年から始まった B 級ご当地グルメの祭典「B-1 グランプリ」。このイベントのスタートにより、庶民的な価格で誰でも気軽に味わえる “B 級 ” と、地域の食文化に根ざしつつ観光客にアピールする料理 “ ご当地食 ” が融合した “B 級ご当地グルメ ” に注目が集まり、各地で大きな経済波及効果を生んでいることは一般にも知られている。先駆的存在の静岡県「富士宮やきそば」の経済効果は、これまでで 500 億円以上といわれている。

ノスタルジックな風景が人気の「古い町並み」通りでは、電線を全て軒下に配し、江戸時代からの建物を現在も保存している

高山市はこんなまち

岐阜県北部、飛騨地方の中央、高山盆地を中心として位置する高山市は、人口 90,866 人、高齢化率 27.0％のまち。平成 17 年に近隣 9 町村と合併し、東京都とほぼ同じ大きさの日本一広い市（2,177.61 km²）となった。見渡せば乗鞍岳をはじめとする北アルプス、御岳、白山などの山々に囲まれた広大な市域は、その 90%以上を森林が占める。山が襞(ひだ)をなして連なるさまから高山市を含む周辺が「飛騨」と称され親しまれている。

飛騨高山グルメグランプリ

今年は 25 の飲食店や団体が、同イベントのために考案したという自慢のご当地グルメ計 25 点を出品。投票券付き食事チケットは 2 食分＝ 900 円（一部運営費）。来場者数は 2 日間で 1 万人、12,000 食を販売した。

高山の食を掘り起こす

前述のとおり、大金をかけずに地域経済を潤す「まちおこし手法」として効果を上げている「ご当地グルメ」。それでいうと高山には、「飛騨牛」や「高山ラーメン」「高山カレー」など、すでにある程度の知名度があり、手っ取り早く人集めができるブランド力を持ったメニューがある。少々ブラッシュアップすれば、第二の「宇都宮餃子」「厚木シロコロホルモン」も遠からじ……はは～ん、なるほどね。というのが、事業名称を聞いた時の正直な第一印象だった。

しかし、「飛騨高山グルメグランプリ」の着眼点はそこではなかった。テーマは『食の創出』だ。

「高山の魅力を語るうえで、食の豊かさは欠かせません。ありがたいことに、飛騨牛や高山ラーメンはそこそこ知られていますが、逆に言うとそこにしかスポットが当たっていないのが現状。でも地域には、他にも色々な名産があるし、芽吹きはじめた食文化もある。それを発掘し、新メニューとして提案するのがこの事業の目的なんです」と実行委員広報担当の坂本大輝さんは語る。

出店者の参加ルールは、地元食材を一品以上使用していることと、調理に創意工夫がなされていること。食材や調理法は指定せず、出品メニューの間口を広げ、自由な発想で高山の食の可能性を掘り起こす。さらに、2 年目の今年は「原則としてこのイベントのために開発したメニューであること」というルールを追加。「オリジナルのメニューであっ

飛騨旨豚のあらびきフランクドック

高山中華ちゃんこ

リコチキ丼

華麗なるフォー

ても、既存のものには、何かひと手間新たな創意工夫を加えて出品してください」と呼びかけ、『食の創出』というテーマを際立たせた。

会場で初披露されるメニューを来場者が味わい、投票して順位を決定する。出店者にとっては新メニューに対するお客さんの反応がダイレクトにわかる、ある意味チャレンジの場となり、来場者にとっては新たな「ご当地グルメ」の誕生に立ち会えるという付加価値的なワクワク感がある。このような双方にとっての「良い緊張感の演出」という発想は、これまでのグルメイベントにない、新しさと可能性を感じた。

クラウドファンディングを広告ツールに活用

イベントは徐々に地元では知られてきたが、まだ開始２年目。様々な課題も抱えている。まず避けて通れないのが運営資金の問題。

もともとは、高山青年会議所（JC）主催の単年事業として企画された催しだったが、イベント終了後、「この事業には地域貢献の未来がある、今後も発展継続させたい」との思いを持った実行委員たちは続投を決意。初年度は、JC の事業費や様々な助成金を受け、運営に当たれたが、２年目はゼロからのスタート。運営費の捻出に「クラウドファンディング」の活用を試みる。クラウドファンディングとは、ある「志」を持った人や団体に対する資金を、インターネットを通じて多数の支援者から収集し実現する手法で、「Crowd（群集）＋Funding（資金調達）」が語源となっている。目標設定金額は100 万円。結果からいうと、目標は見事達成した。

実行委員会の様子。低予算の企画に知恵を絞る

それだけを聞くと、「今は便利な資金集めの方法があるんだな～」と、感じるかもしれないが、世の中そんなに甘くない。目標達成の裏には、実行委員６人がとにかく足を使い、「クラウドファンディングの宣伝」をしてまわった経緯がある。メンバーの熱意に打たれた協力者がサイトにアクセスし、支援してくれたのだ。クラウドファディングのシステムは、目標金額を達成した場合、15％の手数料を支払う。坂本さんは「もちろん純粋にネットだけを見て、賛同してくれた支援者もありましたが、本当の意味では、とにかくメンバー全員で汗をかいて営業に回りました（笑）。僕たちにとって、クラウドファンディングの主たる目的は全国へ向けた宣伝広告のツールだと考えていましたから」と言う。確かに、手数料の 15 万円で全国へ向けた広告が打てると考えたら費用対効果は悪くない。仮に目標を達成しなくても、広告としては機能している。現に記者もこのサイトから本事業を知ったのだ。ネットシステムの合理的な活用法は、他の地域でも参考になるだろう。

６人で１万人を迎える

こうして何とか最低限の資金集めに成功したが、それでも集まった金額は昨年の３分の１程度。少ない運営費で、どれだけ昨年に劣らない設えにできるか、実行委員は知恵を絞った。先にもチラリと触れたが、実行委員のメンバーはたったの６人。イベントの来場者は、２日間で１万人。この規模のイベント運営には、あまりに異例の少人数だ。しかし、少数精鋭だからこそ、一人ひとりの志気が高く、今何をすべきか考え行動する。イベント当日、事前資料で見知った実行委員の動きを、ストーカーよろしくこっそり観察していたが、来場者の応対から、ボランティアスタッフへの指示、マスコミ対応やゴミ集めに至るまで、とにかく全員がフル稼働。「烏合の衆」より「一騎当千」。無駄のない動きに感心するも、坂本さんは「今後も続けていくには、もう少し実行委員を増やさないと厳しいです……」と漏らす。己の守備範囲の限界を知るのも、有能な人間の心得だ。

実行委員長の宇野さん（左）と広報担当の坂本さん（右）

右／投票所では、参加者が真剣な表情でグランプリ選考を行う

下／「とにかく機能的に動く！」実行委員のメンバーたち

イベント終了後、グランプリ入賞を果たした出店者と実行委員で記念写真

参加者を主催者意識に

もうひとつの課題は、主催者と参加者（出店者・来場者）の意識格差。グルメグランプリへの出店料は２日間で２万円。当日の売上金は、すべて店舗のものとなる。運営サイドからすると、近隣にまかれるチラシや新聞広告などにメニューや店名が掲載されるだけでも、十分参加料はペイできるように感じるが、出店者の意識はそうではない。当日の売り上げが予想より伸びないと、主催者への不満が噴出する。

メニューは、スイーツでも食事でも一律 400 円。出店者には、設定金額のなかで創意工夫を凝らして、今後の飛騨高山の名物となるような商品開発をして欲しい。来場者にも、味やコストパフォーマンスだけでなく、「飛騨高山らしさ、地元食材の使い方、おもてなしの対応」なども重要項目として総合評価して欲しい。というのが主催者の思いだが、やはり出店者は当日の売り上げ、来場者はコストパフォーマンスという目先の利益が優先してしまう。

イベントの最終目的はあくまで「まちづくり」。回を重ねるごとに出店者と来場者の意識を「飲食店業界の利益だけのためではなく、町全体の利益のためにこのイベントに携わりたい」という主催者意識に引き上げたいという。到達への道のりは険しいかもしれないが、今後「地域ぐるみで育てるイベント」となることを期待したい。

さて、グルメグランプリ。バラエティ豊かなメニューに目移りするが、己の胃をどう過分に見積ってもすべては食べきれそうもない。坂本さんにお薦めメニューを尋ねてみた。聞けば、ご自身も飲食店経営者でグランプリにも出品していると。ならば、坂本店メニューは外せないか……。「いや～うちのメニューも美味しいんですけど、これとかこれなんかのほうが高山っぽくておススメです」。自然と発された言葉に「志の高さ」を感じ、うなずく頬が思わずゆるむ。ここを皮切りに、高山グルメを席巻するメニューが登場することを祈りつつ、熟考の一票を投じた。

グルメグランプリ順位

優勝 鶏トマ唐揚げ
フレッシュトマトソース掛け
（蔵食房　龍々）

2位 カニ身ばっかりのコロッケ
飛騨産トマトソースがけ
（魚幸）

3位 よもぎのおはぎ
飛騨の煮物セット
（こだわり惣菜みちした）

高山は牛だけでなく豚や鶏も名産で、豚には３種類もブランドが！飛騨トマトを使ったメニューも目立った

第7回 全国水源の里フォトコンテスト

審査員　田沼 武能（たぬま たけよし）　鷲田 清一（わしだ きよかず）　井上 隆雄（いのうえ たかお）

グランプリ

『僕らの居場所』撮影地：岡山県真庭市　**小谷 佳嗣**さん（岡山県真庭市）

［**選評・田沼**］ほのぼのとした印象の作品です。夏のとても暑い日に、ご自宅の裏にある小川で撮影されたそうです。水につかっている子どもたちが実に楽しそう。手を広げ、解放感にひたっています。ごく自然に子どもと水の関係が表現されている、たいへん素晴らしい作品です。下に木漏れ日が入っているのも良いですね。第１回から審査員を務めておりますが、こういうのどかな水源の里の写真には初めて出合いました。

水源の里の魅力を表現した作品、488 点が集まる

協議会参画市町村で撮影された、水源の里らしい生活や文化、四季折々の表情などを収めた作品を募集する、全国水源の里フォトコンテスト。今回は 488 点の応募がありました。8 月末に審査会を行い、グランプリ（1 点）、各大臣賞（3 点）、特選（10 点）を決定しました。

過去の入賞作品は協議会 HP よりご覧ください。
http://www.suigennosato.com/contest.htm

〈審査員〉左から、京都市立芸術大学学長・鷲田清一さん、一般社団法人日本写真著作権協会会長・田沼武能さん、公益社団法人日本写真家協会会員・井上隆雄さん

総務大臣賞

『5月のふるさと』
撮影地：佐賀県佐賀市
伊東 靖洋さん（佐賀県小城市）

［**選評・田沼**］どこを通るか分からない屋形船。あちこち走り回り、この場所に狙いを定めて撮影されたそうです。川にこいのぼりが下がっている風景は各地に見られ、普通に撮ったのでは、よく見かけるつまらない写真になってしまいます。しかしこの作品は、川に反射した太陽が入ったことで、写真がいきいきとしています。実は太陽は偶然入ったそうなのですが、怪我の功名？　自然が味方した素晴らしい写真です。

特選　『雨乞い神事』撮影地：島根県吉賀町
吉崎 佳慶さん（島根県益田市）

特選　『鏡明』撮影地：北海道清里町
湯浅 啓喜さん（北海道札幌市）

特選　『雪鳥』撮影地：滋賀県長浜市
小早川 とし子さん（滋賀県守山市）

特選 『厳冬の調査』撮影地：岡山県鏡野町
河口 毅さん（岡山県岡山市）

特選 『里山の田植』撮影地：新潟県長岡市
佐藤 権さん（新潟県長岡市）

農林水産大臣賞

『凍み大根の郷』

撮影地：岩手県西和賀町　**五十嵐 敏紀**さん（秋田県横手市）

［**選評・田沼**］雪一面の大地のなかで、お年寄りが一生懸命に大根を干している。極めて日本的な生活の一場面です。撮影地の西和賀町は雪が２～４ｍも積もる地域で、「凍み大根」はこの寒い気候を利用して作られる保存食だそうです。大自然のなか繰り広げられる生活のドラマが写っている。主役は何かと問われると、私は大根だと思います。雪はやがて解けて地下に消え、大根の黄色っぽい色調が残るからです。

特選 『幻想の棚田』撮影地：滋賀県高島市
鎌田 高明さん（京都府向日市）

特選 『検断屋敷まつり』撮影地：宮城県七ヶ宿町
鹿又 弘実さん（宮城県丸森町）

国土交通大臣賞

『春の雪』

撮影地：福島県喜多方市　**正木達也**さん（福島県喜多方市）

［**選評・田沼**］撮影されたのは４月中旬。雨がみぞれに変わるのを見た作者は、「いつもの撮影ポイントに行けば、素晴らしい写真が撮れるかもしれない」と希望を抱いて、急ぎ出かけたそうです。雪の大山桜をとらえた俳句や詩のような情景。日本の自然、水源地は美しいですね。

特選 『魚影幻想』撮影地：福島県金山町
星　賢孝さん（福島県金山町）

特選 『五月女』撮影地：島根県雲南市
藤江 松男さん（島根県出雲市）

特選 『散居の夜明』撮影地：山形県飯豊町
鈴木 明吉さん（山形県南陽市）

特集 第９回 全国水源の里シンポジウム〈岡山県真庭市〉

清流が紡ぐ人と人

～農山村と都市の共生を目指して～

10 月 20、21 日の両日、「里山資本主義」で全国から注目を浴びる岡山県真庭市を会場に、９回目となる全国水源の里シンポジウムが開催された。

上流と下流の交流連携を確認

大会の冒頭、太田真庭市長と大森岡山市長が登壇。県内を縦貫する旭川の上流部にある中和（ちゅうか）小学校と下流部の岡山理科大学附属高校、会場を３元中継で結び、流域で取り組む各活動を紹介。住民や議員、自治体職員など約 650 人が集い大いに議論し交流を深め、基本理念である『上流は下流を思い、下流は上流に感謝する』を再認識するシンポジウムとなった。

基調講演は、明治大学農学部の小田切徳美教授。小田切教授は、日本創生会議の増田寛也座長が提唱する「自治体消滅論」に真っ向から異を唱える。講演では「集落は滅びない」という視点から論陣を張った。

パネルディスカッションのパネリストは、真庭バイオマス発電 (株）の中島社長と（一社）アシタカの赤木代表理事、NPO 法人タブララサの河上理事長、太田真庭市長の４人。それぞれが川上での活動と川下の取り組みを紹介。上流と下流の連携交流の必要性を説いた。

最後に、水源の里と流域に暮らす人々が自信を持ち、一体となってこの財産を引き継いでいくことを確認する大会アピールを宣言。参加者が、水源の里再生への決意を確認し合った。

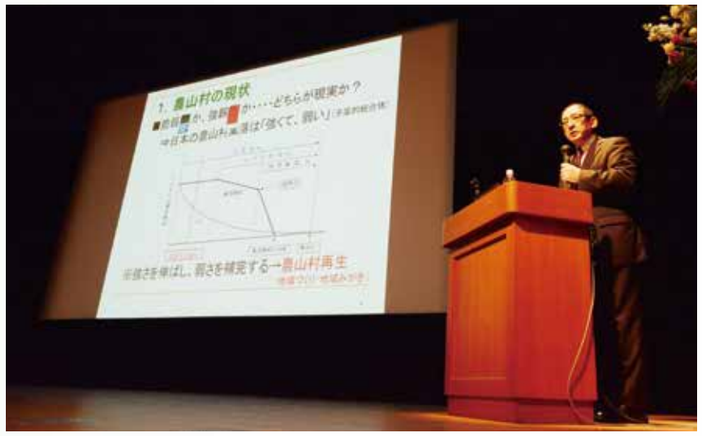
20 日は「勝山喧嘩だんじり」の当日。交流会で懇親を深めた参加者らは、夜の勝山に繰り出し、勇壮なだんじりのぶつかり合いを堪能した。翌日は「大きな里山資本主義」など４つのコースに分かれ、真庭市での先進的な循環型社会の取り組みの現状を視察した。

「勝山喧嘩だんじり」全長5m、重さ2～3トンものだんじりが正面から激しくぶつかり合う

基調講演

見えてきた！農山村再生

明治大学　小田切徳美教授



自身の中間総括的な話として、講演する小田切教授

強くて弱い農山村

農山村では３つの空洞化が進行している。それは、人の空洞化、土地の空洞化、ムラの空洞化だ。まず人が減り、次に土地が減り、集落が減り始めたというのは明らかな現実だ。一方、総務省が５年前に行ったアンケートがある。全国の過疎地域の約 65,000 集落が将来どうなるのかを、集落を熟知する市町村の担当者に尋ねた。その結果、10 年以内に消滅する可能性が危惧された集落はわずか 0.7% だった。日本の農山村集落は本来的に強靭だが「強くて、弱い」という矛盾に満ちた存在でもある。

高齢化率 50% で集落が揺らぐという実態は存在しない。ところが、そのまま続くかというとそうでもない。水害や地震などの災害、鳥獣被害といった外部からのインパクトで集落はポキッと折れてしまう。それを臨界点と呼ぶ。原因は、地域の人々の諦め。諦めが蔓延すると集落の機能はあっという間に衰退する。

早稲田大学の宮口先生が、人口密度が低くても維持できる、今までとは違う集落の仕組みを作り上げることが必要で、それこそが集落再生だと述べておられる。集落再生は、暮らしのモノサシ（主体）づくり。次に、暮らしの仕組み（舞台）づくりで新しいコミュニティを形成する。最後が、カネとその循環（シナリオ）づくりである。

小さな経済を回せ

別のアンケートで、現在の経済的な生活の満足度を尋ねると、不満足が７～８割を占める。農山村の地域経済はかなり厳しい。それでは、月当たりいくらの追加所得があれば満足かを問うと、多くが３万円と回答した。この３万円をいかにして獲得するか？ そこで、例えば直売所のような小さな経済を回すことが重要となる。その小さな経済が集積すると、若者の定住が可能となる中程度の経済が成立する。これまでの実践で農山村再生の方向性は見えてきた。そして良い風が吹き始めている。移住者の推移をみると、2009 年から４年後の 2013 年は 8,181 人。８年後には約７万人と予想されている。

太陽路線こそ再生の道

集落再生の課題も見えてきた。１つ目は、地域に対する当事者意識。増田レポートの地方消滅と危機感をあおる北風路線は、地域の立ち上がりに期待する意図があったのかもしれない。しかし、消滅と言われて立ち上がれる集落はごく一部である。農山村の再生はほぼ入口まで来ている。そのことを多くの人々で共有し、当事者意識を高める太陽路線を私は推奨したい。

２番目の課題は時間の確保である。地域の再生には時間が必要。時間をかけることで逆臨界点が生まれる。反転上昇を迎えるまでに少なくとも３年を要する。

３番目の課題として不可欠なのが、集落再生への持続性。農山村が新たなライフスタイルやビジネスモデルとなることで、若者が魅力を感じ集まってくる。農山村は、出生率が高いことや再生エネルギーの蓄積、災害時のバックアップの場ともなりえるなど、多くの優位性を持つ。農山村の持つ可能性を発信し、都市と共有することが重要だ。農山村再生の方向は定まってきた。現在の位置からもう一歩、前進してほしい。農山村再生はそこまで来ているのだ。

パネルディスカッション

農山村と都市の共生を目指して

森林資源を軸に循環型社会を実践

太田昇真庭市長
（全国水源の里連絡協議会副会長）

真庭市の現在の人口は約48,000人。毎年600人のペースで減り続け、人口減少と高齢化は避けられない。しかし、真庭市では高齢者にも就労が確保されているため、悲観的に捉えていない。農山村は都市部に比べ収入は低いものの、生活実感では遜色のない満足度を提供できる。循環型社会を実践し、地域への自信と誇りの回復を誘導していきたい。真庭市の総面積の8割を占める森林は優良な資源。なかでもCLT（Cross Laminated Timberの略：木材を縦と横に重ねた分厚パネル）を普及させ、林業再生と同時に木質バイオマス発電の燃料を確保する、真庭モデルを推進していく。

地域の小さな優位性を磨く

一般社団法人アシタカ
赤木直人代表理事

結婚を機に、大阪から真庭市の中和地区（人口600人、250世帯、高齢化率40%）に移住してきた。現在の仕事は、集落の人々から持ち込まれる木材を適正価格で買い取り、薪に加工して「津黒高原荘」のボイラー燃料として提供すること。身上は「会社都合を優先させない」「地域の人々に負担をかけない」こと。爺ちゃんが楽しみながら晩酌代を稼ぐ感覚を大切にしたい。食の豊かさの共有と地域コミュニティの醸成を目的に開催している「燻製の勉強会」も好評を得ている。水源の里の優位性は水と食。小さな優位性を磨き、真庭市全域に広めていけたらと願っている。

木材集積基地は宝の山

真庭バイオマス発電株式会社
中島浩一郎代表取締役

わが社ではバイオ燃料として、市内の製材所や山林から排出される木の皮や端材、従来は山林に放置されていた枝や切株、竹まで、すべて買い取っている。結果、木材集積基地は一見ゴミの山。しかし私は宝の山だと思っている。真庭バイオマス発電所では、黒四ダムの8%にあたる発電量があり、180人を雇用。さらなる拡大も可能と確信している。将来は木質電源の供給基地を目指す。林業の低迷は、買い取り価格の海外との価格差が原因。日本には有効活用されていない木材が多い。発電事業を地域活性化のエネルギーに成長させていきたい。

さりげなく環境への配慮を伝えたい

NPO法人タブララサ
河上直美理事長

“タブララサ”とはラテン語で“何にも染まらない真っ白”の意。メンバーは20～30代の若者が中心。旭川の下流域である岡山市で様々な交流イベントを開催している。12年間続けてきた「西川キャンドルナイト」は、西川緑道公園の一角をキャンドルで灯すことで、省電力や環境保護を考える機会にしてほしいと始めたイベント。そのほか、「有機生活マーケット」や「満月BAR」など、若い人が楽しみながら環境のことを考える時間を提供している。ヒト、モノ、コト、情報が集まる居場所づくりを提案し、100年続く取り組みに育てていきたい。

コーディネーター　小田切徳美教授

「今回のディスカッションで、里山資本主義の目指す方向とは、環境保全型の地域づくりであることが明らかとなった。人々の考えや生き方を大切にした仕組みづくりの大切さも確認できた」と、成果をまとめた。また「都市と農村の交流は連携の形に至っていない」と課題を指摘。さらに「行政に期待される役割は、条件整備に尽きる」と続けた。最後に「大きな里山資本主義と小さな里山資本主義は、相互に補完しあう関係を形成しなければならない。真庭モデルの目指すべき姿と方向性が鮮明になった」と述べ、パネルディスカッションを締めくくった。

オプショナルツアー

真庭バイオマス発電所

大きな里山資本主義コース

藻谷浩介氏の著書『里山資本主義』で大きく取り上げられた「真庭バイオマス発電所」を見学。山主などから持ち込まれた未利用材や市内の製材所で発生する端材や樹皮を基地に集め、チップなどに加工し、バイオマス発電所の燃料として活用する。発電所は本年4月に稼働。真庭で供給される木材資源を、年間約15万トン使用し、79,200MW（一般家庭22,000世帯分）を発電。そのうちの9割を販売するというもの。全国から注目を浴びているエネルギーの地産地消の最前線を学んだ。その後、「美しいまちなみ大賞」を受賞したのれんや雛飾りで名高い城下町勝山を散策した。

津黒高原荘に導入されている薪ボイラー

小さな里山資本主義コース

真庭市全体での取り組みを「大きな里山資本主義」と呼ぶのに対し、地域ごとの取り組みを「小さな里山資本主義」と命名。薪の活用を進める中和地区を視察した。ここでは薪生産組合と一般社団法人アシタカが、薪ボイラーを使用する津黒高原荘に薪を供給。輸入に頼る化石燃料の一部を地元産の薪に置き換え、地域内に小さな経済循環を起こしている。さらに、程よく日が当たるようになった山にはクロモジが成長し、それをチップに活用した燻製を特産品として開発中だ。その後、環境省の名水100選に指定された塩釜の冷泉、ひるぜんワイナリーを見学した。

廃食油を燃料にする、温泉の送迎車

市民のエコな取り組み体感コース

温泉地である湯原（ゆばら）地区では、廃食油をバイオディーゼル燃料として再利用し、温泉客の送迎車を運行している。昨年からは回収エリアが市全域に拡大された。生ゴミやし尿・浄化槽汚泥等を原料としたバイオガスシステムでは、ゴミの減量とメタン発酵による発電や、肥料化による農産物の生育効果について検証中。今後は、地域循環型のリサイクルシステムの構築が期待されている。昼食を兼ねて訪れた「真庭あぐりガーデン」は、安全安心の地元食材販売とエコをテーマにしたマーケットが並んでいた。暮らしに身近な取り組みが多く、参加者は熱心に聞き入っていた。

懐かしい学校給食を手に思わずにっこり

新・古木材建築体感コース

1990年代からオーストリアを中心に発展してきた新たな木質構造用材料（CLT）。真庭市に本社を置く「銘建工業株式会社」は日本でいち早くこの取り組みをスタートし、開発、普及に努めている。

視察では、製造工場をはじめ、CLTを利用したバス待合所、3階建て共同住宅を見学した。次に訪問した国重要文化財の旧遷喬尋常（せんきょうじんじょう）小学校は、地元の優れたヒノキ・スギがふんだんに使用されたルネッサンス風木造校舎。映画「ALWAYS三丁目の夕日」のロケでも使われた教室で、地元ボランティアが提供する懐かしの学校給食を体験した。

地方創生担当大臣の石破茂氏

地方から始めるニッポン・イノベーション！

人口急減時代の地方振興策

当協議会が主催する「地方から始めるニッポン・イノベーション！　地方創生『首長勉強会』」の第２回（協力・時事通信社、後援・内閣府、総務省、農林水産省、国土交通省）が８月24日、前回と同じ東京・東銀座の時事通信社で開かれた。今回は前半に石破茂地方創生担当大臣が「地方から創生する我が国の未来」と題して講演。後半は「ないものはない～離島からの挑戦」として、島根県海士町の山内道雄町長が講演した後、前回講演した明治大学の小田切徳美教授が、山内町長からさらにまちづくりのポイントを聞いた。

石破大臣講演
農林漁業の展望に期待

石破氏はまず、田中角栄元首相の日本列島改造論など従来の地方振興策と今回の地方創生の違いを語った。

最大の違いは、これまでは経済が成長し、人口が増え続けている時の政策で、今回は人口急減期を迎える時代の政策だということ。「国家の要素は、領土と国民と統治機構。国民が減ることはある意味、国家が溶解しつつあるということ。これを有事と言わずして何と言うのか」と石破氏。

続いて地方と東京の関係を語った。「東京は食料が作れない、再生可能エネルギーが作れない、出生率は全国最低。消費する都市だけが残る国家があるはずがない」。また、1955年から1970年にかけて地方から東京へ移り住んだ500万人もの人々の多くが今、高齢者になっている。医療・介護の不足、全国最低の出生率という負荷を克服して、東京が日本をけん引し続けるには「この負荷を、どれだけ地方の発展という形で減らすことができるかが、地方創生の営みだと思っている」との見方を示した。

昭和40年代後半から50年代半ばにかけ、公共事業と企業誘致で地方の人口が増えた時期があったが、その再現は期待できない。現在の国の財政状況で公共事業を劇的に増やすことは極めて困難であり、低価格大量生産のビジネスモデルが成り立たない時代に、かつてのような工場立地も望めない。

そこで石破氏は、まず農業、漁業、林業の現状と将来の可能性について語った。「土が豊かで春夏秋冬まんべんなく雨や雪が降り、最近は夏が暑いがそれでも気候温暖。農業に必要な要素は全て揃っているのに、何でこの国の農業はこんなに衰退したのか」「排他的経済水域の面積こそ世界６位だが、日本の海は深いので魚を獲れる海水の体積は世界第４位。なのに何で漁獲量も漁獲高もピークの半分以下に落ちたのか」「世界中、木を切り過ぎて困っているが、日本だけ木を切らなさ過ぎて困っている。何でこんなことになったのか」

石破氏は「政策が時代に合わなくなったとしか言いようがない」と断言。生産性の向上、付加価値の増大、コストの抑制を図る政策に、国と地方が連携して取り組み、可能性を引き出さなければならないと語る。

林業では、欧州であれば珍しくない木造10階建てのオフィスや住宅の研究が、高知県や岡山県真庭市で始まっている。農業では、かつて水分が多くてアジアでは売れないと言われた日本の米が、今は絶賛されている。あるいは、日本はイタリアとフランスに対して貿易赤字が続いており、負けているのは食、酒、ファッションだが、これらは日本も勝負できる分野。石破氏は「今まで本気で売ろうとしてこなかっただけではないか」と指摘した。

円安効果もあって好調の観光についても、苦言を呈した。世界で最も観光客が多いフランスは、人口より多い外国人が来る。日本は本来なら8,000万人の誘客も夢ではないのに、先進国の中では大きく引き離されて最下位。「おもてなし」が日本の武器だと言われるが、フランス人の愛想のなさを考えれば、もっと重要な要素があると訴えた。「観光の４要因とされる四季、自然、歴史・伝統・文化、そして食べ物。日本はどこにも引けを取らない」。どの国の人が、日本の何を求めて、日本のどこに来たいと思うか。緻密なマーケティング、ターゲティングの重要性を訴えた。

地方版総合戦略の要は住民の参画と連帯意識

続いて地方版総合戦略の策定に関し、自治体に求めたいことを語った。既存の総合計画を、どれだけの住民が知っているか疑問を呈し、今度の計画には、住民の参画と連帯意識が不可欠だと強調した。具体的な連携の要素は「産官学金労言」。「学」では、地域に大学や高専がなくても、島根県海士町のように、地元の高校生たちが参画している例を挙げた。「金」は金融機関、「労」は労働組合、「言」は地元のメディア。そのうえでPDCA（計画・実施・評価・改善）サイクルを機能させ、KPI（Key Performance Indicator、重要業績評価指標）の設定、すなわち、それぞれのまちで外国人観光客数、出生率、農業生産額などの何に、どのような数値目標を掲げるか決めるよう求めた。

次に「東京在住者の今後の移住に関する意向調査」（概要、内閣官房）の結果を示し、50代男性や10代、20代男女の５割ほどが地方で暮らしたいと思っていることを紹介。人手不足の今こそ、生産性や所得を上げる努力をして、地方に移住したい人が仕事に就ける環境を整える必要があると語った。「自分の地域に自信と誇りがない所に人は来やしません」と石破氏。

政府は、地域経済分析システム（RESAS・リーサス）でデータを提供するとともに、地方創生人材支援制度も創設した。石破氏は「地元と一体となってやれる人を出しているつもり。RESASはもっとバージョンアップして情報も出します。新型交付金でもお手伝いします」「一人でも多くの方が参加する形で地方創生、日本創生をともにやらせていただければ」と力説して締めくくった。

山内町長講演
自分たちの島は自分たちで守る

後半は全国の注目を集める島根県海士町の山内町長が登壇し、まず約30分間講演した。

海士町へは毎年2,000人ほどが視察に訪れるそうだが、そこで山内町長は「私のところは成功事例ではない、チャレンジ事例ですよ」と話す。

講演する山内町長。「地方創生はまず職員・住民の意識改革から」と自身の経験を語った

町のキャッチコピー「ないものはない」には、「都会のような便利さはない、しかし、なくてもよいという気持ち」が込められている。西ノ島、知夫里（ちぶり）島を含む周辺3島で海士町のある中ノ島だけが米を栽培。「昭和の名水百選」があり、製塩業もある。西ノ島町、知夫村との合併問題が起きた際には、「最終的に俺たちは自給自足でやる」と宣言して合併を選択しなかった。「自分たちの島は自分たちで守る、これが地方自治の原点ではないか」と山内町長は語る。

地方創生の取り組みにあたって、まず必要なことは「過去の反省」だという。父親がIターン、ご自身もUターンの山内町長。行政経験はなく、町議6年を経て2002年に町長に就任した。「中へ入ってみて分かったのは、島根には有名な先生がおられて、最後は先生にお願いして補助金を取って来るのが首長の仕事。あとは消費するだけで、戦略もノウハウもなかった」と振り返る。

2001年度末に国からの借金が101億5,000万円あり、2008年には財政再建団体転落が必至だった。さらに小泉内閣の「地財ショック」で1億9,000万円を削られ、策定したのが「海士町自立促進プラン」だ。

「守り」の戦略はやはり行財政改革から。職員に「座して待つ役場」から「出向く役場」へ変わるよう意識改革を求めた。町長の給与を30％カットし、職員には求めない方針だったが、総務課長から「私たちもついていかせてください」と言われた時は泣いたという。組合からも給与カットの申し出があった。その後も町長50％、議員も30％など厳しい時期が続き、現在は職員、議員が元に戻って管理職5％、町長30％となっている。

「住民の意識が変わり、やりやすくなった」と山内町長は言う。75歳以上のバス運賃半額補助や各種団体の補助金返上などを自ら申し出る動きが続出。職員から、給与カット分で子育て支援条例を作る提案も出た。出産祝い金は3人目50万円、4人目100万円出している。

中ノ島（面積33.46 km²、周囲89.1km）1島からなる海士町

「いわがき 春香」CAS凍結システムの導入で、鮮度を保ったまま遠方へ出荷が可能になった

「攻め」は「第1次産業の再生」にかけた。海産物と少しの農産物だが、「初めから市場として首都圏を狙った」のが大きな特徴。細胞を壊さずに凍結するCAS（Cells Alive System）を導入し、機械と建物で5億円の投資をした。「海士の岩ガキ」は今では築地でブランドになり、第3セクター「株式会社ふるさと海士」は2009年度から黒字に転じた。山内町長は「島の外へ出荷して外からお金を持って来なければ。中でいくら金を回しても持続性はない。岩ガキとシロイカは、ドバイ、上海、シンガポールへも出荷している」と話した。

人口は7月末現在2,365人。高齢化は続いているが、1年間に生まれる子どもがかつては10人前後だったのが、今は20人近くになった。Iターン者は2004年度以降、483人。特徴は、「仕事があるから来たのではなく、島に仕事を作りに来た」こと。

例えば京都大学大学院修了後、トヨタ自動車でエンジニアをしていた人が30歳で退職。島で企業の社員教育や島の特産物を通信販売する会社を興した。

県立隠岐島前（おきどうぜん）高校も注目されている。ポイントは2010年に公営塾の隠岐國学習センターを作ったこと。子どもを松江の高校に通わせれば3年間で400万～450万円かかる。若者もお金も出ていくのを食い止めようと塾を設立。最も少ない時は1学年28人だったが、現在は定員が2クラス80人まで増えた。県外からの入学枠は定員24人に対し、今春は170人以上が受験した。「偏差値を上げるだけではなく、キャリア教育もしていて、生徒が車座になって地方創生を語る」という。島前高校の卒業式では「仕事を作って待っていないよ。仕事を作りに帰って来いよ」と話すという。

山内町長は最後に「1,000億円の新型交付金は少ないかもしれないが、国がいくらいい政策をしても、今までのようなことをしていたら、結局地方は駄目だといわれる。知恵を出さないといけない。ステージは地方であり、そこで舞うのは住民だ」と呼び掛けた。

第2回はモデレーターとして参加した小田切教授（左）、参加者の問いに応える山内町長（右）

質疑応答　山内町長×小田切教授

明治大学の小田切教授がモデレーターとなって、山内町長に、講演では触れなかった福祉、議会などについて尋ねた。

福祉は、山内町長が1977年に母親の介護などで島へ戻った当時、デイサービスが月1回しかないなど厳しい状況だったが、「今は完全ではなくともだいたい対応できる」までになったという。障害者の就労は、以前なら隠岐の島へ出ていたのだが、今は島で「ふくぎ茶（クロモジ茶）」作りの仕事ができるようになっている。

議会対策では苦労が多いようだが、「議会がもっと政策形成能力を持たないと本当の意味の実力は出せない。お互いに切磋琢磨するものだと思っている」と答えた。

小田切教授はさらに、地方版総合戦略づくりの手法や進捗状況を聞いた。スタッフは公募で10人採用し、職員の主査以下と合わせて22人。第3次総合計画まではコンサルタントを使ったが、第4次と今回は入っていない。第4次総合計画では、環境部会のリーダーを中学生が務めた旨、山内町長が説明した。

質疑応答　山内町長×参加者

続いて参加者との質疑に入り、福井県おおい町・中塚寛町長は、住民の意識を変える工夫を質問。山内町長は、保健福祉センターの温水プールが赤字になって料金を引き上げた際のエピソードを紹介した。利用者や議会の反対を押し切り、一時期は利用者が減ったが、今はにぎわっているという。「親切な政治とは、できないことはできないとはっきり言うこと」と山内町長。

福島県川内村・遠藤雄幸村長は島外から若い人が来るようになったきっかけや、隠岐國学習センターのシステムを質問した。島前高校に分校、廃校の危機が迫った2007年に「人づくり元年」を宣言。文科省の枠では正規教員が9人ほどだが、県の支援もあって15人に。さらに町で5人補い、東京や大阪でも説明会をして生徒募集をした。この間、町は年に6,000万円、県も3年間500万円ずつ投じたという。町営塾のスタッフは十数人。法人化し、センター長はリクルート出身者。山内町長は「今、160人ぐらい通っている。熱の入れようはすごい」と説明した。

第3回 首長勉強会（当日の模様は次号に掲載します）
開催日　11月14日（土）
講師　日本総合研究所調査部主席研究員 藻谷浩介氏 他

写真提供・P16-17、19 時事通信社　P18 海士町

本誌に関するお問い合わせ、ご連絡先は
全国水源の里連絡協議会　水の源編集委員会
綾部市役所 定住交流部 水源の里・地域振興課　〒623-8501 京都府綾部市若竹町8番地の1
TEL：0773-42-4271　FAX：0773-54-0096　E-mail：suigen@city.ayabe.lg.jp
http://www.suigennosato.com/index.htm

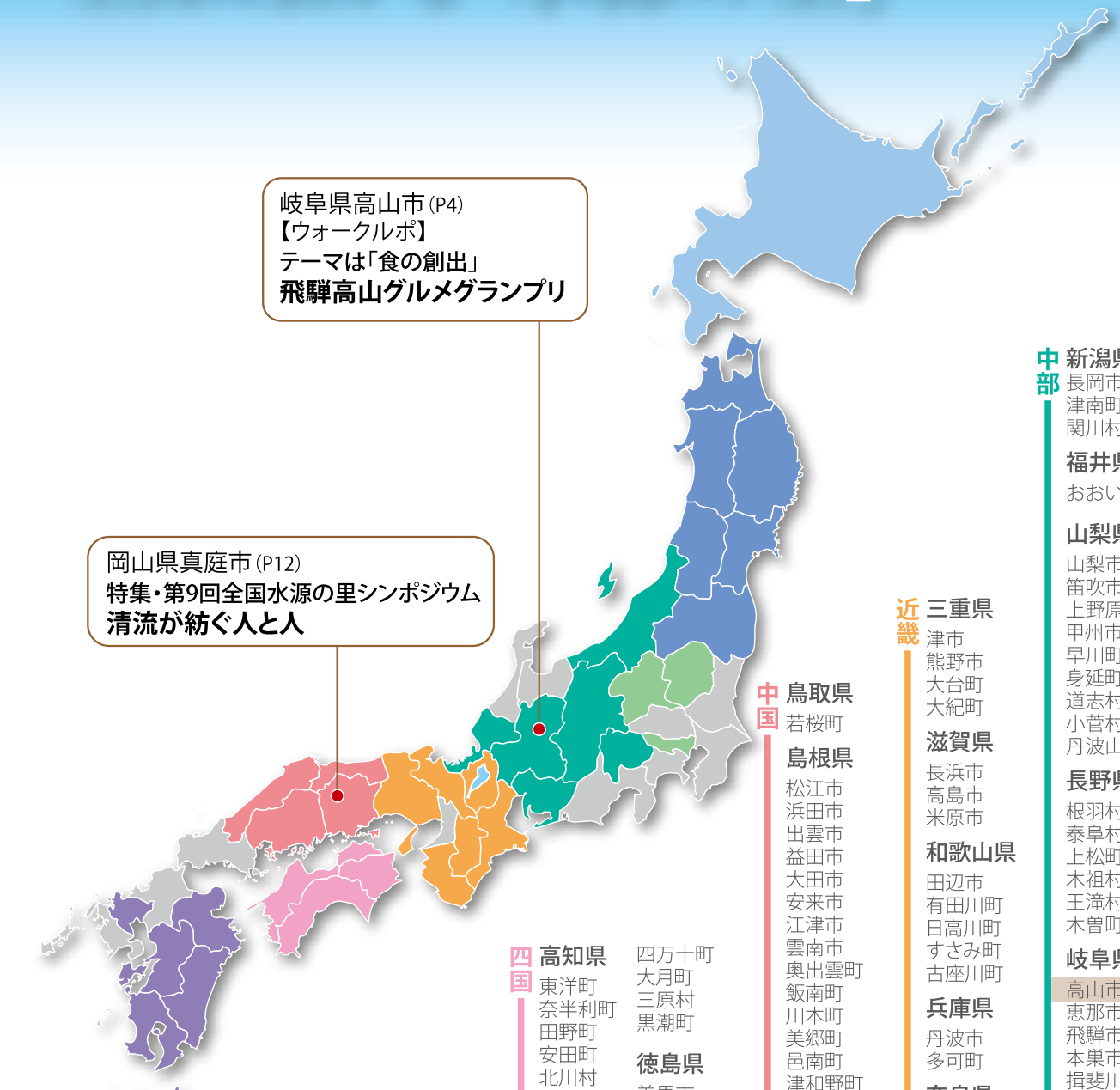
定期購読のお知らせ
『水の源』が年4回お手元に届きます。年間購読料：1,000円（送料込）
お申し込みは、上記の電話、ファックス、メール、HPから

上流は下流を思い、下流は上流に感謝する

全国に広がる「水源の里」

岐阜県高山市(P4)
【ウォークルポ】
テーマは「食の創出」
飛騨高山グルメグランプリ

岡山県真庭市(P12)
特集・第9回全国水源の里シンポジウム
清流が紡ぐ人と人



北海道
北海道
下川町
美深町
中川町
清里町

東北
青森県
西目屋村
岩手県
遠野市
一関市
葛巻町
西和賀町
宮城県
七ヶ宿町
富谷町
秋田県
東成瀬村
山形県
小国町
飯豊町
福島県
喜多方市
相馬市
下郷町
南会津町
北塩原村
西会津町
磐梯町
猪苗代町
柳津町
金山町
昭和村
矢祭町
川内村

関東
栃木県
日光市
群馬県
上野村
南牧村
みなかみ町
東京都
檜原村
奥多摩町

中部
新潟県
長岡市
津南町
関川村
福井県
おおい町
山梨県
山梨市
笛吹市
上野原市
甲州市
早川町
身延町
道志村
小菅村
丹波山村
長野県
根羽村
泰阜村
上松町
木祖村
王滝村
木曽町
岐阜県
高山市
恵那市
飛騨市
本巣市
揖斐川町
富加町
川辺町
七宗町
八百津町
白川町
東白川村
御嵩町
白川村
愛知県
新城市
設楽町
東栄町
豊根村

近畿
三重県
津市
熊野市
大台町
大紀町
滋賀県
長浜市
高島市
米原市
和歌山県
田辺市
有田川町
日高川町
すさみ町
古座川町
兵庫県
丹波市
多可町
奈良県
天川村
川上村
京都府
京都市
福知山市
舞鶴市
綾部市
宮津市
京丹後市
南丹市
京丹波町
与謝野町

中国
鳥取県
若桜町
島根県
松江市
浜田市
出雲市
益田市
大田市
安来市
江津市
雲南市
奥出雲町
飯南町
川本町
美郷町
邑南町
津和野町
吉賀町
海士町
西ノ島町
知夫村
隠岐の島町
岡山県
真庭市
里庄町
鏡野町
広島県
庄原市
神石高原町

四国
高知県
東洋町
奈半利町
田野町
安田町
北川村
馬路村
芸西村
本山町
大豊町
土佐町
大川村
いの町
仁淀川町
中土佐町
佐川町
越知町
梼原町
日高村
津野町
四万十町
大月町
三原村
黒潮町
徳島県
美馬市
佐那河内村
那賀町
牟岐町
美波町
海陽町
東みよし町
香川県
まんのう町
愛媛県
西予市
久万高原町

九州
佐賀県
佐賀市
多久市
嬉野市
大分県
大分市
佐伯市
臼杵市
熊本県
阿蘇市
宮崎県
延岡市
小林市
綾町
木城町
諸塚村
日之影町
鹿児島県
日置市
伊佐市

水の源　第31号
企画・発行：全国水源の里連絡協議会
発行日：平成27年12月
編　集：「水の源」編集委員会

私たちは水源の里を応援します!!

全国環境整備事業協同組合連合会
一般社団法人 全国浄化槽団体連合会
全国森林組合連合会
全国農業協同組合連合会
電気事業連合会
独立行政法人 水資源機構
公益社団法人 大分県薬剤師会